

## ヨーロッパの学界とルソー=ヴォルテール没後200年

永 治 日 出 雄\*

1978年はルソーの没後200年にあたり、ヴォルテールのそれと重なったこともあって、ヨーロッパでは多くの記念行事が催された。筆者はこの年の六月すえに渡欧して、フランスではルソー=ヴォルテールを記念するふたつの国際学会に出席し、スイスでもこれに関連するいくつかの展示場や資料館を訪れた。こうした経験を通して把握した学界の動向と研究の現状について、筆者はその概略を報告したい。

### (1)

ふたりの没後200年を記念して、欧米の諸国で開催された学会は驚くほど多く、筆者の知るかぎりでも12を数える。すなわち、5月には6、7の両日《ルソーおよびヴォルテール——その関係と影響》と題しロンドンで、18日から21日まで《ヴォルテールとドイツ》と題しマンハイムで、また26日から28日まで《ヴォルテールとイギリス》と題しオックスフォードで、6月には2、3の両日《ヴォルテール=ルソーとネーデルランド=オーストリアにおけるフランスの影響》と題しブリュッセルで、また26日から30日には《ルソーとヴォルテール(1776—1778—— 隔暹した人物の仕事と関心を1978年の観点より)》と題しニースで、7月には3日から7日までパリで、また14日から17日まで《ルソー没後200年》と題しケンブリッジで、9月には5日から8日までシャンティイで、10月には2日から6日まで《フランスおよびポーランドにおけるヴォルテール=ルソー》と題しワルシャワで、3月から5日まで《ヴォルフエンビュッテルにおけるヴォルテール》と題しヴォルフエンビュッテルで、また19日から21日まで《ヴォルテールとルソー》と題してニューヨークで、さらに11月には16、17の両日《ヴォルテール=ルソーと寛容》と題しアムステルダムで、等々。これらのうち筆者が参加したのは、7月のパリ大会および9月のシャンティイ大会である。

ルソーがこの世を去ったのは7月2日であるが、日曜

にあたるためか特別の行事はなく、翌日の3日から《ヴォルテール=ルソー没後200年記念国際学会》(Colloque international, Bicentenaire de la mort de Voltaire et Rousseau)が、パリの国立学術研究所(C.N.R.S.)の会議場で開かれた。この会場はセヌ河畔の静かな環境に囲まれ、橋をへだてて壮麗なチュイルリー公園を臨む位置にある。大会を主催したのはふたつの学会、《フランス文学史学会》(Société d'histoire de la France)と《フランス十八世紀研究学会》(Société française d'étude du 18e siècle)であった。前者は長い伝統をもつ権威ある学会として知られ、機関誌《フランス文学史評論》(Revue d'histoire littéraire de la France)には啓蒙思想に関しても、しばしば重要な論文が見出される。また、学際的な団体として10年ほど前に結成された後者には、哲学、史学、文学などさまざまな分野の人々が参加し、《十八世紀研究者国際年報》(Annuaire international des dix-huitiémistes)をとおして、新しい資料の発掘や埋もれた思想家への再評価など注目すべき業績を送り出している。

5日間に及ぶパリ大会は、前半は《1778年ならびに1978年におけるヴォルテールおよびルソー》、後半は《1778年における啓蒙の世界》という主題で構成され、ヴォルテールの研究で有名なパリ大学の教授ポモー(R. Pomeau)の開会宣言で始まった。第1日の午前には、《1778年の現実のなかで》と題して、ルセルクル(J.-L. Lecercle)が総括報告を担当し、ついで8人の研究者から、ヴォルテールとルソーの死をめぐる未公開の文献の検討、当時のフランスおよびスイスにおける思想的・文化的状況の考察などが発表された。

この大会に参加して、筆者がとりわけ驚きと魅力を感じたのは、そこにおける豊かな国際性と学問の多様さである。たとえば、ヨーロッパの絶対王政とルソー=ヴォルテールとの関係を課題として、ソブール(A. Soboul)が総括報告を行った第1日の午後には、ベルギー、ソ連、ハンガリー、オーストリア、スペインからの報告者

\* ながや ひでお 愛知教育大学

が、各国における絶対君主と啓蒙思想の関連を究明し、ルセル (J. Roussel) が総括した第 2 日の午後にも、イタリア、ポーランド、イギリス、西ドイツからの報告者が、各国における現代の文化とルソー＝ヴォルテールの思想との関連を論じた。さらに後半の第 4 日には、啓蒙思想が演劇、小説、詩歌、出版などの領域において検討され、また彫刻、絵画、建築などとの関連についても考察があった。ただし、このように幅広く統一的な企画も、実際には総括報告が長すぎたりして、個々の発表が手薄となる傾向にあったことは否定できない。

なお、第 2 日の午前にはルソーとヴォルテールの著作について、文献研究の最近の成果が示され、最終日には思想と学問の歴史のなかにこのふたりをあらためて位置づける試みもなされた。また、教育学に関連の深い報告としては、リール大学のトレナル (L. Trenard) とパリ大学のテリノー (R. Tessonneau) による発表があり、前者はフランスの学校ではヴォルテールとルソーについていかに教えられるかを、後者はフランスのテレビにおいてヴォルテールとルソーがいかに扱われるかを考察した。しかし、これらふたつの発表は、論題の目新しさは認められるとしても、それほど本格的な研究とは感じられなかった。

このような報告のあとには、つねに活発な質疑や討論が展開し、しばしば激しい応酬の火花が散った。ときには発表の途中であっても、聴衆の間から疑問や不満の声が発せられる厳しさもみた。会場の関係で参加者は 300 名ほどに制限されていたが、その 3 分の 1 ぐらいは女性であるように思われた。筆者はのちに訪れた国立図書館でも女性の閲覧者の多いことを知り、学問や研究における女性の位置が日本の場合よりもはるかに大であらうと推察したのである。

さて、この大会では一日が貸切バスによる見学旅行にあてられ、パリ近郊にあるルソー＝ヴォルテールゆかりの地をまわることになった。私たちはまず並木の美しいソー城 (Chateau de Sceaux) に案内され、そこで春から開かれていた展示会《ヴォルテール——ヨーロッパを旅する人》を見ることができた。今年は夏に入っても異常な低温とのことで、この日もときに激しい雨に悩まされたが、ついで私たちはルソーに由緒のあるモンモランシ (Montmorency) の資料館、シャリィ (Chaalis) の僧院、エルムノンヴィル (Ermenonville) の公園に立ち寄った。こうした旅行のさいには他国の研究者と親睦を深める機会も多く、とくにルソー終息の地エルムノンヴィルでは、公園入口のレストランで、200 年記念の特別メニューが用意され、食事と歓談の楽しい時を過ごした

のである。

## (2)

シャンティ学際的研究センター (Centre de Recherches Interdisciplinaire) の主催で行われた国際学会は、記念と研究の対象をルソーに限定し、《ジャン・ジャック・ルソーと現代における良心の危機》と題していた。そして、パリ大会が啓蒙思想を全体的に展望し、その歴史的系譜と社会的背景の解明に力点を置いたとすれば、シャンティイ大会はむしろルソーの思想の特質やその現代的意味の把握を主眼とするようであった。また、前者がシンポジウムの形式をとって、盛り沢山と思われるに比し、後者は 12 の個人発表から成り、個々の報告を充分に開けるよう配慮されていた。

こうした報告者のなかには、ガニユバン (L. Gagnebin) やゴールドシュミット (V. Goldschmidt) など著名な人々も含まれ、ルソーの教育思想に関しても三つの発表があった。まずプレスト大学のエオン (J. Eon) は《エミール——人間本性を描いた小説》との題目のもとに、ルソーが《エミール》で用いる仮構と想像は、「自然の人間」を創造するため必須の手段である、と主張した。さらに《新教育の先駆者、ジャン・ジャック・ルソー》と題するピカルディ大学ルシュヴァリエ (B. Lechevalier) の発表は、ルソーの教育理念と二十世紀の新教育の理念を対比し、前者がより根源的で、強固かつ深遠であることを論証した。そして、シャンティイ大会を企画するにあたり指導的役割を演じたラヴィエ (A. Ravier) は《ルソーと人間の良心の教育》という主題のもとに、《エミール》が良心の教育をすすめる道程であると述べ、現代における道徳的危機が十八世紀における道徳的危機に似通っていることを力説した。

ところで、筆者にはこの学会の大きな魅力は、なによりも周囲の素晴らしい環境であるように感じられた。パリから 40 キロの距離にあるシャンティイの古城は、フランスにおけるもっとも美しい城館のひとつであろう。この典雅な城内で大会の第 2 日は、シャルパンティエ (Charpentier) 夫妻によって、ルソーが作曲したいくつかの歌曲が演奏された。また、会場と宿舎を兼ねたフォンテーヌ文化会館 (Centre Culturel "Les Fontaines") も格式ある建物で、広大な森のなかに位置していた。

これらの学会の企画や運営において、教育学の専門家がどのように関与したか、筆者には分らない。しかし、教育の問題を論じたシャンティイの報告者も、本来は哲学か文学の領域の人達であった。筆者はこの年のはじめ

から、ヨーロッパのいくつかの機関に問い合わせ、ルソーを記念する行事について情報を入手したが、教育学の分野と思われる団体からは、ついになんらの回答も届かなかった。

6月に開かれたニース大会には多くの日本人が出席し、日本からの報告も提出されたと伝えられる。とはいえ、パリおよびシャンティイの学会では、それぞれ5名前後の参加にとどまり、確認したかぎりでは、筆者を除き、すべてフランス文学専攻の人達であった。

なお、フランスでは7月にルソー＝ヴォルテールの記念切手が発売された。新聞では《ル・モンド》と《ユマニテ》が、ふたりの思想家についてかなりの紙紙面をあて、週刊では教育関係の《レデュカシオン》の4月27日号と文芸関係の《レ・ヌヴェール・リテレル》の7月5日号が200年記念の特集を組んでいた。

### (3)

ルソーの生誕の地であり、ヴォルテールが住いを構えたことのあるジュネーヴでは、1978年のはじめからいくつかの行事が行なわれていた。それらはこの地に根拠をもつジャン・ジャック・ルソー学会 (Société Jean-Jacques Rousseau) とヴォルテール研究所・資料館 (Institut et Musée Voltaire) の共催になるもので、パリ大学のボモーヤケンブリッジ大学のレイ (R. Leigh) などの連続講演が中心とされ、ジュネーヴ音楽院による演奏会も含まれていた。しかし、筆者がジュネーヴに到着した8月には、講演会と演奏会はすでに終り、ルソー＝ヴォルテールに関する三つの展示会だけが開かれていた。

ルソーについてももっとも多くの史料や文献を所有するジャン・ジャック・ルソー資料館 (Musée Jean-Jacques Rousseau) は、ジュネーヴ大学構内の大学・公共図書館のなかにある。ここでは《ルソーの生涯と作品》と題する展示が一般に公開されていた。展示には呆れるほど沢山のルソーの石像や絵画やメダルが並び、また《社会契約論》への下書きとしてとくに重要な《ジュネーブ草稿》をはじめ、ルレーみずから加筆修正した《エミール》の初版や《サヴォワ人司祭の信仰告白》の草稿もあった。

この図書館には宗教改革に関連する史料も多く、また亡命中のレーニンが通った記録も残されていた。蔵書はよく整理され、外国人にもきわめて親切であったので、筆者も毎日のようにここで啓蒙思想についての文献を調べることができた。図書館の向うには、美しい庭園を隔てて、カルヴィンの宗教改革記念碑が立ち、その背後の

坂と石段を昇っていくと、風格ある建物の並ぶ旧市街に出る。ここにはルソー学会の年報を出版している古くからの書店や、知識人好みのカフェとレストランが続き、また毎週水曜にはこの街の一角でスイス・ロマン・オーケストラの野外コンサートが催されていた。

大学の近くには堂々たるジュネーヴ歴史美術館もあり、常設の作品のなかに、ラ・トゥールが画いたルソーの有名な肖像画が含まれている。また、記念行事のひとつとして、ルソーの創作《エフライムのレヴィ人》を題材としたサン・トゥール (J.-P. Saint-Ours) の一連の絵画が陳列してあった。この画家は感情の表現を重視するルソーの芸術理論から大きな影響を受けたといわれる。筆者はパリの装飾美術館でもルソーの植物採集に関する展覧に接し、またオペラ座の展示室にも彼の胸像と音楽作品が置かれているのを見た。こうした作品から察せられる感受性の豊かさや人間性の広さこそ、他の思想家にもまして、ルソーに人気や関心が集まる理由かもしれない。

ベスターマンにより創立されたヴォルテール研究所・資料館もジュネーヴの市内にあり、かつてヴォルテールの住んだデリスの館 (Les Délices) を使用している。ここでも《ヴォルテールの生涯と著作》という展示があったが、訪れる人は少ないようで、ベルを鳴らすまで玄関は閉ざされていた。ヴォルテール研究所の主監であり、プレイヤード版《エミール》の校閲者でもあるヴィルツ氏 (C. Wirz) とはパリ大会で会っていたので、ここに集められた遺品や蔵書について親しく説明を聞くことができた。とくに筆者は、この研究所が古い草稿や手紙を保存するにあたって、どこよりも周到な配慮を示しているのに感心した。これらの文献を主体として、刊行されつつあるヴォルテールの全集と、とりわけ書簡集は、啓蒙運動の展開を把握するための、きわめて重要な資料である。一般にジュネーヴでは、文献の保存と検討に努力が傾注され、現在もっとも権威のあるプレイヤード版ルソー全集も、ルソー学会やルソー資料館の成果が結実したものにほかならない。

### (4)

ジュネーヴから汽車で2時間ほどのヌーシャテルではルソーが滞在したペルーの館 (Hôtel du Peyrou) が保存され、ルソーに関する多くの資料が公立図書館に集められている。この図書館を訪れた筆者は、近くに明るい湖の眺められる閲覧室で、《政治経済論》の草稿などを落着いて調べることができた。ロビーには《ルソーのスイス》と題して若干の絵画や遺品が展示され、またル

ソーに関連する各国の翻訳や研究書が陳列されているなかには、日本人による書物も見出された。

しかし、筆者はヌーシャテルに来て、この地でも各種の記念行事が計画されたことをはじめて知った。まず、春にはヌーシャテル大学の文学部において同大学教授のアイゲルディンガー(M.Eigeldinger)やルソー学会会長のスタロビンスキー(J. Starobinski)らの連続講演会が開かれた。また、《ルソー友の会》(Association des amis de J.-J. Rousseau)では、自然を愛したルソーを偲ぶ展示会やハイキングが企画された。音楽と演劇の催しも相当の数にのぼり、ルソーのオペラ《村の占師》

だけでも8回にわたって上演されたという。

《孤独なる散歩者の夢想》のなかに画かれたサン・ピエール島(Ile de Saint-Pierre)へは、ヌーシャテルから船で行くことができる。「自分をもっとも幸福に感じさせてくれる土地」とルソーが語ったその島には訪れる人も少ない。そこでは静かな岸辺と緑濃い林が昔の様子をとどめ、うす暗い木蔭に老いたルソーの像が置かれていた。あの空虚で冷えびえするパンテオンや騒音の絶えないルソー島よりも、美しく穏やかなエルムノンヴィルやサン・ピエール島のほうが、ルソーの霊を慰めるにははるかによさわしい、と筆者は思ったのである。

下記の資料を実費で配布しております。ご希望の方は、代金(送料共)をそえてお申し込み下さい。

	配布価	送料
入学試験制度の教育学的研究 第1集	500円	120円
入学試験制度の教育学的研究 第2集	1,000円	160円
入学試験制度の教育学的研究 第3集	500円	120円
入学試験制度の教育学的研究 第4集	1,000円	120円
大学入試制度問題シンポジウム(レジメ)	300円	100円

<申し込み先>

113 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
 東京大学教育学部内  
 日本教育学会 気付  
 入試制度研究委員会

◇ なお、1集～4集およびシンポジウムをまとめてお申し込みの場合は送料200円です。

# 教育学研究

第 45 卷 第 4 号

昭和 53 年 12 月 (季刊)

〈特集 ルソーの教育思想——没後 200 年を記念して——〉

宮崎俊明	ルソーの教育思想と近代問題……………	273
森田伸子	近代的子ども観の形成と『エミール』……………	285
永治日出雄	フランス《百科全書》における教育項目の 意義および性格……………	295
原聡介	戦前のわが国におけるルソー教育思想のとらえ方……………	304
室俊司	親の教育認識と「エミール」理解……………	314

〈外国学界情報〉

永治日出雄	ヨーロッパの学界とルソー＝ヴォルテール没後 200 年……………	324
-------	----------------------------------	-----

〈書評〉

野村昭夫	川島清吉著「プラトンのアカデメイア」……………	328
高橋敏	平山和彦著「青年集団史研究序説」(上巻・下巻)……………	331
海原徹	「大正教員史の研究」—浜田陽太郎の書評に答える……………	334

〈外国文献紹介〉

葉根正明	東独教育科学アカデミーの比較教育学研究……………	336
------	--------------------------	-----

〈図書紹介〉

〈教育学関係学会大会報告〉

〈学会集報〉

〈特集原稿募集〉